

文献紹介

G. Haensch, A. Lallemand und A. Yaiche:

『Kleines Deutschland-Lexikon: Wissenswertes über Land und Leute』(ドイツ小事典—土地と人々について知っておきたいこと)

Beck 1994年 144ページ DM 14.80

最初に断わっておかなければならないが、本書『ドイツ小事典』は「地理学」の本ではない(世間一般の人々から見れば「地理」、あるいはドイツ語で言う「Landeskunde」の本になるのかもしれないが)。にもかかわらず評者がここで紹介の筆をとったのは、本書がドイツを理解するうえで有用であると感じたためであり、さらに地理的情報を提供するという仕事と地理学との関係について考えさせられたからである。前置きはこれくらいにして、本書の紹介に移りたい。

本書は、一言で言えば、外国人向けのドイツ小百科事典である。ただ外国人向けとは言っても、ドイツ語で書かれていることからわかるように、ドイツで生活する外国人を主な読者対象としている。著者の3人は、本来ロマンス語学やドイツ語学を中心に学んだ人たちのようである。

見出し語は、評者の計数によれば、全部で825項目ある。ただし、見出し語だけがあつて、他の語を参照するよう指示してあるものが、半数以上(約52%)の426もあるので、実質的には400足らずということになる。検索を容易にするためか、見出し語は分野ごとにまとめず、アルファベット順に配列している。なお巻末に、ドイツの行政(州県)区分図、教育制度の図、裁判制度の図、方言分布図が添えられている。

見出し語として挙げられている言葉は、おそらく「Landeskunde」には入るのであろうが、しかし我々の考える「地理学」とは、ほとんど直接関係のないものばかりである。試しに、本文1頁めに挙げられている項目を列挙すると、以下の如くである。「外務省」、「夜間ギムナジウム」、「議会」、「高校卒業資格試験」、「職場確保措置」、「防諜機関」、「リストラ」、「枢軸国」、「68年世代」、「全ドイツ自動車クラブ(ADAC)」、「アーダム=リーゼによれば」、「待降節募金」、「待降節」。

著者の前書きによれば、収録語には五つの柱があ

る。第一には他言語に訳しえないようなドイツ文化の語彙(景観・風俗習慣・飲食物・礼儀作法など)、第二にはドイツの政治・行政・経済・文化・社会に関係する制度・組織・問題の表現、第三にはよく言及される歴史事項(20世紀を中心に)、第四に新聞でよく使われる略語や慣用表現、そして第五に特記すべき人名・地名である。

地理学に関係のありそうな用語としては、景観の関連で「高原放牧地(アルム)」、「アルプス」、「荒野(ハイデ)」、「泥炭地」、「バルト海岸」、「北海岸」などが挙げられている。また地名としては、「バイエルン」、「テューリンゲン」などの州名、「ラインラント」、「シュヴァーベン」などの地方名、その他「プロイセン」、「東部地域」などがある。ただ、そのような言葉が全体のごく一部にすぎないことは、上に述べたとおりである。

我々がドイツについて知ろうとする時、地理学者の書いた本をひもとくのは常道である。しかし、それで全部カタがつくというものでもないことも、また事実である。地理学者の書く「ドイツ地理」は、「ドイツ」の一面にすぎない。歴史・政治・経済・日常生活などなど、ドイツは様々な側面を持つ。我々がドイツについて知りたいと思う時、それはドイツの食物についてもかもしれないし、あるいはドイツの歴史についてもかもしれない。そういう知識欲を満たしてくれるハンディな1冊として、本書を位置づけることができる。

しかしながら、こういうドイツ事情の紹介という仕事において、(博物学の伝統を捨て去った)現代の地理学がどこまで存在意義を持ちうるのかという点についても考えさせられる。たとえば、本書の著者は語学(文学)畑の人であり、内容的にもいわゆる地理用語は地名などごく一部である。最近日本で出版されているこの手のドイツ紹介本⁷⁾でも、地理の影の薄さを見るにつけ、その感を深くする。

なお本書は、同じ出版社の「世界の国々」シリーズの55冊めである。アイルランドから始まる同シリーズには、日本の巻もすでに収められている⁸⁾。

(小田匡保)

〔注〕

- 1) 西川正雄編 (1992) : 『もっと知りたいドイツ』弘文堂, 351頁。池内紀監修 (1992) : 『ドイツ (読んで旅する世界の歴史と文化)』新潮社, 429頁など。
- 2) Pohl, M. (1992) : *Japan - 2. Aufl.*, Beck, 291S.